

手話が広がってほしい

永野 莉琴

私は、生まれた時から耳が聞こえません。家族の間では、相手の手話と動いている口の形を見て、手話で話しています。少し大きめの音の場合、音だけは聞こえるけど、全く話されている内容はわかりません。

小学校に入学してから、国語と算数は難聴学級で勉強して、他の教科は、クラスで勉強しています。

一年生の最初のころは、クラスの中でだれも手話を知らないし、字で書いて知らせてもらうのも無理だと思い、悩んでいました。でも、クラスの女の子の一人が、手話を覚えてくれました。それ以前は、先生と話す時に先生の言っていることが全くわかりませんでした。手話を覚えてくれた女の子のおかげで、全てわかるようになりました。小学校生活の中で、その時が一番うれしかったです。

学年が上がるにつれて、手話のできる子が増えてきました。なぜ、たくさんの子が手話を覚えてくれたのかというと、私が通っている難聴学級の先生や担任の先生のおかげです。音楽会の時には、私のクラスと他のクラスの子たちもいっしょに、手話をつけて歌を歌っています。私は、「なるほど、歌を手話であらわしたら、みんなが手話を少しずつできるようになるかもしれない！！」と思いました。

手話だけでなく、メモに書いてくれる子も増えてきました。私は、「この学校へ通って良かった。」と思いました。五年生ごろになると、手話のできない子も、身ぶりをつけたりメモに書いたりして、話をしてくれるようになりました。また、友達と遊んでいた時に、後ろから近づいてきた車の音に気づかないと、友達が注意してくれたこともありました。手話であらわす、メモに書くなど、いろいろな方法で伝えてくれて、とてもうれしいし、みんなへ感謝の気持ちをたくさんもっています。

おばあさんの家へ行った時、「わが指のオーケストラ」というまん画がありました。私は昔の聞こえない人達の手話は、どうなっていたかわからなかったので、読んでみました。その本は、大阪市立盲啞学校という、耳が聞こえない子と目が見えない子がいっしょに勉強をしていた学校についての話です。昭和のはじめのころ、学校で手話が禁止になりました。私のお母さんが小学生の時も、手話をせず口だけで話をしていました。とても苦しい思いで過ごしていたそうです。でも、日本で大阪市立盲啞学校だけは、高橋潔という先生のおかげで手話が禁止になりませんでした。聞こえない子たちは、とても喜んでいました。そこが、すごく感動しました。

聞こえない人達にとっては、手話が大切な言語です。日本人だけでなく、外国人にも手話が広がってほしいです。みんなが手話を知ってくると、聞こえない人はみんなと手話でお話できるようになります。むりやり、全部でなく、少しずつでも手話を覚えてくれるとうれしいです。そのために、私はみんなに手話を教えていきたいと思います。